

昭 10
A
486

東郷元帥の偉業

海 軍 省

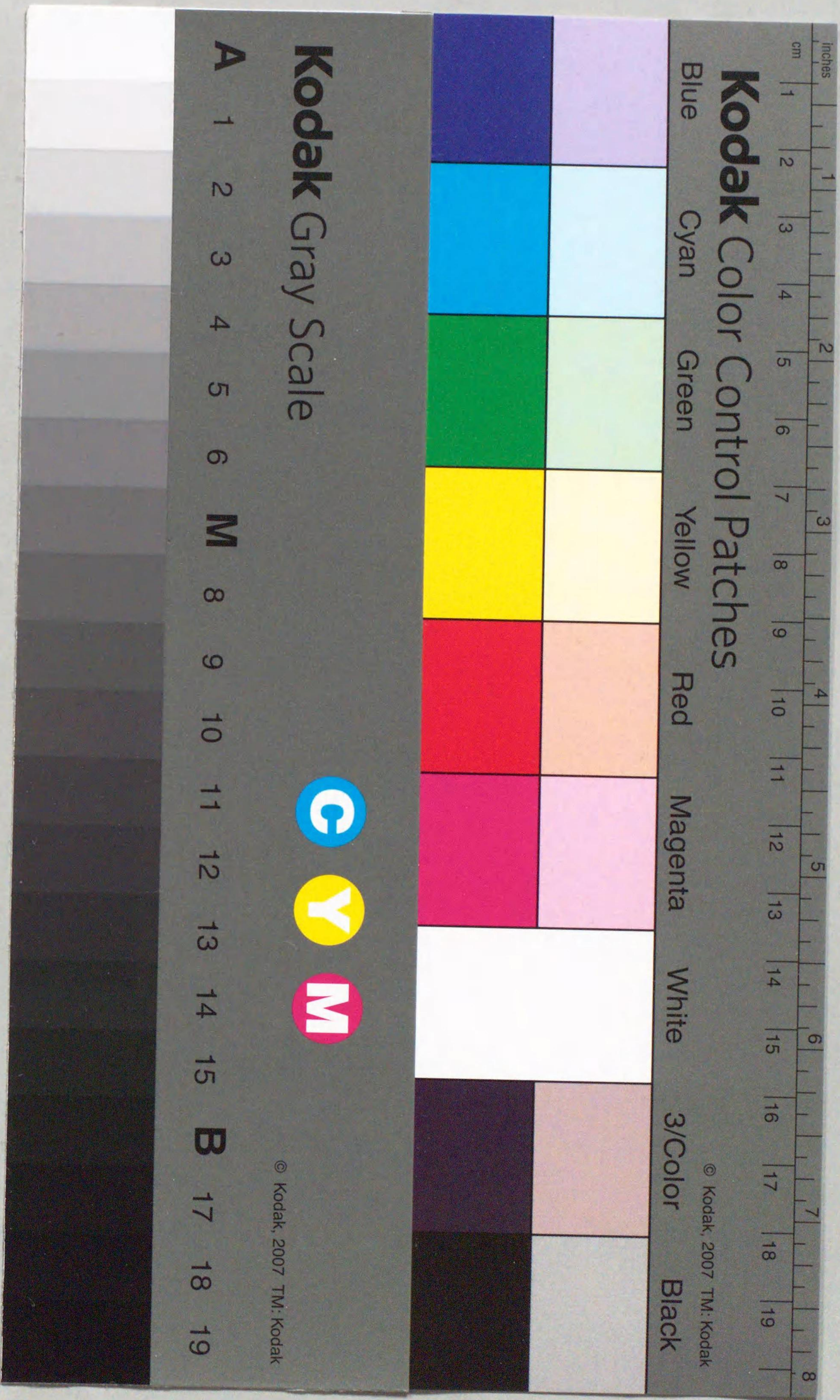
立憲民政黨
政務調査館

昭和十年四月

(以印刷代謄寫)

昭 10
A
486

10. 5. 23



昭 10
A
486



(昭和八年九月撮影)

帥 元 の 年 晩

松ろかふる心に
つらさを感ずは
みそがはしてま
天つちの神

辛八郎

五

歌和の懐述帥元

はしがき

今年ハ帝國空前ノ重大問題タル軍縮會議ニ當面シ我全海軍ハ舉ツテ異常ナル緊張ヲ以テ之ガ對策ニ全力ヲ傾倒シツ、アル所、時恰モ日本海々戰三十周年海軍記念日ニ際會シ、而モ東郷元帥ノ一年祭ヲ迎ヘントスルニ當リ往時ヲ回顧シ元帥ヲ追慕スルノ念愈々切ナルハ日本國民ノ齊シク抱ク情操ナルベシ。

依テ元帥ノ偉業ヲ欽仰スル爲、元帥ニ最モ縁故深キ小笠原中將閣下ニ特ニ本稿ノ執筆ヲ依頼シ弘ク江湖ニ頒ツ次第ナリ。

昭和十年五月

海軍省

東郷元帥の偉業 目次

口 繪

表紙題字 大角海軍大臣書

晩年ノ元帥（昭和八年九月撮影）

元帥述懐ノ和歌

本 文

| | | | |
|----|---|-------|------|
| ○至 | 誠 | | (1) |
| ○養 | 素 | | (10) |
| ○活 | 躍 | | (14) |
| ○識 | 見 | | (10) |
| ○沈 | 勇 | | (14) |
| ○信 | 念 | | (16) |
| ○偉 | 功 | | (17) |

| | | | |
|----|---|-------|------|
| ○恪 | 勤 | …………… | (四〇) |
| ○遺 | 訓 | …………… | (四三) |

東郷元帥の偉業

海軍中將 子爵 小笠原長生

○至 誠

至誠神ニ通シテ成敗ノ先幾ヲ制シ沈勇事ニ臨ミテ安危ノ大局ヲ決ス身國難ニ當リ功海戦ニ崇シ朕ノ東宮ニ在ル羽翼是レ頼リ卿ノ三朝ニ仕フル股肱是レ效ス徳望域中ニ充チ聲華海外ニ溢ル洵ニ是レ武臣ノ典型實ニ邦家ノ柱石タリ

這は元帥東郷平八郎侯の薨去に際し賜りたる御誅中の御詞で、洵に畏き極みである。古往今來重臣の數は多いが、斯くも難有き御誅を拜戴したものが果して幾人あつたであらう。恐れながら先その冒頭に於て至誠神に通じてと世にも尊き御誼を賜はり、尋いで身を以て國難に當り、海軍に盡瘁して黄海・日本海等數度の海戦常に偉功を奏したるを嘉させ給ひ、更に東宮御學問所總裁として御輔導の大任を完うしたる事。明治・大正・昭和の三朝

に歴仕して輔弼の臣たりし事。随つて徳望は國中に充ちほまれは外國にまで溢れ、洵に軍人のてほん國家のいしずゑである。と歎賞遊ばされたるは唯々感激に堪へぬ次第で、恐れながら元帥の爲人も功績も悉くこれに盡き、縦し千萬言を費すとも斷じて此の外に出づるものは無いのであつて、然なきだに謙廉不競の元帥の英靈さぞかし恐懼し居られるであらう。

思へば元帥の八十八年の生涯は、御誅に仰せられたる如く、神に通ずるの至誠を以て一貫してをる。然して其の『誠』といふ文字を討究し見ると、『言』と『成』との二つの合字で言ふことを成し遂げる義となり、取りも直さず言行一致を意味して居るのだ。

斯様な誠心が絶頂に達したなら、神と感應道交して神人一如の妙境を示すべきは當然の理であつて、元帥が八面玲瓏公生活に於ても私行に於ても、一點の陰翳を留めて居られないのも怪むに足らないのである。

斯くの如く公私ともに更に曇りの無い元帥には、それに基づく三つの著しい反映が表れてをる。

其の第一は上にも下にも外にも内にも何れの方面に向つても、全然敵といふものが無い

事であつて、古來澤山の偉人傑士は出てゐるが、大なり小なり文句が付き、無疵の者としては殆ど無い。従つて其の疵のある所に敵が存し、左傳に所謂『大徳は小怨を滅す』といふわけにゆかないのである。然るに我が東郷元帥に至つては徳望中外に漲り、其の薨ぜらるるや、一兒童をして、『東郷さんでも死ぬることがあるのかな』(日本及日本人東郷元帥追悼號)と叫ばしめて居るではないか。人間死を免れぬことは誰れも承知してをりながら、餘りにも崇拜し敬慕してゐる人に對しては、死といふ觀念を超絶して、何時までも繁昌であれかしと、希ふのが人情の常で、前記の兒童が無心の獨語は、かゝる人々の氣持を代表した言葉ではあるまいか。

更に翻つて元帥の薨去に對する外人の評言を觀よ。合衆國國務長官ハル曰く、

『日本の皇帝陛下は東郷元帥の死によりて獻身的にして忠誠なる臣下を失はれた。又日本國民は最も名聲赫々たる一偉人を失ひ、更にまた世界は卓越せる崇高なる人格者を失つた。』

萬事に付いて露骨に感情を表現する合衆國民中の或る有力者は、日露戦役後眞面目に語るらく、

『東郷にして若し籍を合衆國に移したなら、吾人は彼を大統領に選舉するに躊躇しない。』
 言あまりに突飛にして、戲言のやうに聞做されもするが、元帥が同國訪問の際、陸海軍
 俱樂部の將官連が、寄つて集つて元帥を擔ぎ舉げ、之を新調の大統領の椅子に腰懸けさせ
 た舉動より看れば、必しも前言を狂氣の沙汰として貶し去る譯にはゆかないものがあり、
 畢竟するに元帥が徳望の致す所と解するの妥當なるを覺ゆるのである。

又佛國の名士クロドフ・アレルは、

『東郷元帥は偉人中の偉人で、世界各邦のそれにして之に匹敵するものなく、唯敬崇する
 の外なし。』

と讚歎して居るし、更に世界の新聞王を以て自任してゐる英國のロンドン・タイムス紙
 は、

『東郷元帥は日本國民の師表であると同時に世界歴史上稀有の偉大なる海將で、加之赫々
 たる勳功を以て經歷の最後を飾つてをる。それにも拘らず其の性格溫厚高潔にて、嘗て
 自ら榮達を求めず、終始清貧に安んじて世を終つた高士である。』
 と激賞し、同じくモーニング・ポストは、

『東郷元帥は偉大なる海將であつて、其の果斷と智略とに依り、無敵なる日本艦隊が出來
 したのであるが、併しそれ以上に尊崇すべきは、東郷元帥を生んだ日本國の偉大さであ
 る。』

と敬異の意を表してをるし、殊に吾人をして感懐に堪へざらしめるものは、嘗て元帥の
 ために手痛い目に遭つた露國人の感想で、日本海海戰當時、同國艦隊の一水兵として此の
 激戰に従事し、今や同國の文豪たるノヴィコフ・プリボイは述懐して曰く、

『東郷元帥は偉大なる提督であつた。日本に彼の如き名將が現れて、我が艦隊を思ふ存分
 に撃滅して呉れたことを寧ろ感謝する。(中略)東郷の威名は我が艦隊が日本海に近づく
 にしたかひ、何となく一種の恐怖を我々に與へてゐた。果せるかな彼の攻撃動作と戰術
 とは見事なもので、之に反して我が艦隊のロジエストウエンスキー司令長官の應戰振り
 は、徹頭徹尾東郷に威壓せられて形なしであつた。斯うした名將も遂に亡くなられたか、
 惜みても餘りある。』

以上の數口の談話に徴しても、元帥が如何に外國人にまで敬愛せられて居たか判るで
 あらう。されば其の國葬に際し、英。米。佛。伊。中華民國の各邦は特に軍艦を派遣し、

加之英國海軍大將ドレーヤ。米國海軍大將アツバム。佛國海軍中將リシャール。伊國海軍大佐プリヴオネージ。民國海軍中將王壽廷等が、特に葬儀に參列した如きは、世界を通じ一國の臣下として殆ど類例を見ざる所であつた。

其の第二は元帥の如き八面玲瓏たる偉人の經歷は、老若男女を問はず如何なる人に取りても、此の上もなき精神修養の資となる事である。

一概に偉人と云ふても決して一樣では無くて、それ／＼異つた性質を具へて居る。従つて其の中には我々が手本とするに不適當な者もあるから、迂濶に倣ひてもしやうものなら、取返しのかね結果に陥らぬとも限らない。例へば豪傑を倣ひ損つて粗暴漢となり、智者を倣ひ損つて輕薄才子や詐僞漢になつたりする類であるが、其處に至ると、八面玲瓏陰なく疵なき元帥を手本としたなら、縦し倣ひ損はうとも、正直な日本人となりこそすれ、決して人の道を踏違へるやうな横道者にはならないのである。

元帥が日露戦役より凱旋せられた當時、東京市長の職にあつた尾崎弐堂は、元帥を論評して肯綮に當れる説をなしてゐる、其の論旨の概要を紹介すると、まづ英雄にはでなものと、じみなものとの二種あるを言ひ、

『彼の好んで自己の功業を語り、勳功を述べ、舉止鷹揚眼中人なきが如き者。或は恭謙士に下り、時に喜んで施與し、故に弊衣を纏ふ如き者。又は故に斯かる手段を取らざれども、時に應じ機に觸れて胸中の英氣を煥發するを辭せざる如き者は、孰れも前者に屬す。』

と述べ、更に論旨を進めて、

『一舉一動他の視聽を惹き、延いては則ち一代の聲譽となり、流れては則ち後世の史乘となり、世間凡庸の徒をして近づく能はざるが如き感を懐かしむるものは、でなる英雄の事なり。』

と斷じ、一轉してじみな英雄に論及し、

『所謂じみな英雄は、力めて自己を顯彰若くは誇揚するに意なきは勿論、如何なる時に際しても胸中の英氣を發することなし。是の故に凡庸者流或は看て以て無能となす。唯事業の大局を達觀し、性行の全體を通覽する者にして始めて異常傑出の人たるを解す。乃ちじみな英雄の本色は、些の銜氣なく矯飾なきは言ふを待たず、寧ろ自ら異常傑出の人たるを悟らざる底の所に在り。』

と賞讃し、更にはでの英雄を密畫に、じみの英雄を疎畫に譬へ、

『形迹は倣ふべきも風神は模し難し。之を以て密畫に偽作多く、疎畫に贋物少きと同様に、奸才の徒動もすればはてなる英雄を擬ね得るも、畢にじみなる英雄を學ぶ能はず。』と喝破して愈々東郷大將の本論に及び、

『今や東郷大將の大名は赫灼として五州の外を燭せり。然れども其の一言一行の上に於て果して特異なる點あるか。警效に接する者は唯其の溫厚謙虚にして多く語らざるを見るのみ。多く語らずと雖も、十萬の貔貅は其の一令に聽いて生命を鴻毛の輕きに比し、赫灼たる大名は遠く五州の外を燭す。我是に於てか所謂じみなる英雄の實際を目前に睹ることを得たり。』

余の大將に敬服するは、大將が蓋世の偉功を奏しながら毫も之を自覺せざるもの、如くなるにあり。其の鞠躬如たるは作意の恭謙に非ずして自ら其の功業の偉大なるを知らざるが爲なるに似たり。蓋世の偉功は悉く是部下將卒盡瘁の結果にして、我が智謀の結果に非ずと確信するが爲なるに似たり。天地を震撼する萬歲聲裏に驩迎せらるゝに當つて、先づ大將の胸中に浮ぶは部下の死傷者なるべし。唯夫此の心あり以て十萬貔貅の死力を

勳を奏して之を自覺せず。是東郷大將の東郷大將たる所以にして、所謂じみな雄の最上乘なるものにあらずや。』

痛快適切の評言で、特に密畫と疎畫との譬の如き、最も妙なりと謂ふべしだが、蓋し偉功に對する元帥の觀念についての忖度に至りては、余は更に／＼崇高なる觀念の元帥に存在し居るのを確信するのである。

日の本の海にとゞろく勝鬨は

御稜威かしこむ聲とこそ知れ

這はこれ日本海海戦直後に於ける元帥の述懐であつて、其の眞精神は此の一詠に活現してをるではないか。即ち其の大意を解釋すると斯うだ。

日本海海戦に於て大勝利を得たので、艦隊の將兵が擧ぐる勝鬨の聲は、海に轟きわたつて居るが、併しかゝる大勝を得たのに就いて、それを自分等の功だなどと考へてゐる將兵は一人も無く、孰れも皆これ一に大元帥陛下の御稜威の效す所であると仰ぎ奉つてをる。されば其の勝鬨も、實は戦捷に酔ふたる自賛の聲ではなくて、廣大無邊の御稜威を畏んで

居るのだから、その健氣な精神を知つて貰ひたい。との歌意であつて、元帥が如何に部下將兵の精神を觀察し居られたか判るのである。

開は姑く別問題として、峯堂の説たる、奸才の徒の擬ねし能はぬ程率直な元帥の精神は、一面に於て眞摯に之に倣はんとする者には、前記の如く縦し倣ひ損ねたにしても、決して邪道に陥らしめることなく、何處までも正直なる日本臣民たらしめずんば已まないのである。至誠の徳大なりと謂ふべしだ。

○養素

明治三年十二月十一日、

驥艦見習士官被仰付月俸拾四圓被下候事』

六部省よりの辭令を受けて海軍に出仕したる東郷元帥が、爾後六十餘年に亙る其の我が海軍の側面史とも謂ふべきもので、之を咀嚼玩味したならば、嘗に海軍一般海國民に取りても修養上無二の良友たるべきものであらう。仍て余

は此の限りある紙數の内て其の大意を語つて見たいと思ふ。

抑も皇國に於て軍艦間に戦争が交へられたのは、明治元年一月四日阿波沖に於ける薩摩の春日艦(排水量一〇一五噸、速)と徳川の開陽艦(排水量二八一七噸、速)との砲戦を以て嚆矢とするのである。尤もこれは兩藩の私闘で、皇國海軍の戦争では無いとの理窟も立たない事はあるまいが、當時の情勢より言へば公の海戦と觀て差支ないのであつて、兎に角最初の軍艦同士の砲戦に、元帥が二十二歳の青年を以て参加せられ、加之四十斤施條砲を掌つて、比較的正確な彈著を示して居るのは、何處までも海軍と深い因縁があり、且將來世界無比の大提督たるべき前兆とも思はれるのである。

此處で少ばかり、皇國海軍の創建に就いて話させて貰はふ。

一體我が海軍の基礎は何時ごろ出來たのかといふと、前記の阿波沖の海戦があつてより、僅に十三日を隔てた明治元年一月十七日、海陸軍務課といふものが新規に京都に設けられた。これが海軍の出來るそもゝの濫觴であるが、夫れは僅々半ヶ月程で軍防事務局といふものに替り、これ亦四ヶ月程で軍務官となり、此處に始めて海軍局・陸軍局が設置せらるゝに至つたのである。處が同年十月になり軍務官に對して、

『海軍は當今第一の急務なるを以て速に基礎を建立すべし』

との御沙汰があり、續いて翌十一月海軍局を東京築地に新設になり、翌明治二年七月になると、軍務官が廢されて兵部省が置かれ、續いて翌三年二月に至つて同省中に海軍掛・陸軍掛が出来、更に築地の名古屋藩邸には海軍操練所といふものが設けられ、此處で海軍將校を養成することになり、續いて横濱に於て龍驤艦(熊本藩より獻納したもので排水量二五三〇噸)に各艦の將校・下士・兵を集めて砲術を練習せしめる等、銳意軍事の教育訓練が行はれた。元帥が見習士官を仰付かつたのは實に此の時であつたが、其の遠大の志はこれ丈を以て満足することができず、機會の到來を待つてゐるうち、恰もよし翌四年に至り、軍艦乗組中より成績優等者を選抜して英・米兩國に派遣することに成り、元帥も其の選中に入つたので、蛟龍始めて池中を出で、他日の雄飛に備ふるの運命を把握した。

英國留學は前後七年に亙り、其の中二年餘を練習船ウースター號に送つたが、これが最も深い印象を元帥に與へてゐるので、後年(明治十四年)再度の渡英に際し、彼は懐しのウースター協會の歡迎會に臨んで大要斯う答辭を述べてゐる。

『ウースターは過去四十年間余の須臾も忘るゝ能はざる名であつた。然うして圖らず今夕

諸君と相見たる余の感想は、知らず識らず遠き過去を辿り、諸君と共にウースターの甲板上に於て結節の作方などを教へられた當時を追憶させられると同時に、舊師スミス大佐の溫容が目前に浮ぶのを禁じ得ないのである。同氏は余に取りて最も親切で最も仁慈ある人であつた。最近の戦争(日露戦争を指す)中同氏は毎々余に親切な書を寄せて、余に慰藉と激勵とを與へて呉れた。スミス大佐及び同夫人の肖像はウースター號の寫眞と共に寶物として余の書齋に掲げてあるのに、その大佐は既に逝かれ、余をして過去の厚情を謝するに由なからしめてをる。余は其のやる瀬なき思ひをウースター協會に移し、其の永久に榮えんことを祈るのである。』

抑も元帥が英國に留學したのは、海軍に關する知識を研くためであつたこと勿論であるが、其の他に於て後年大海將たるに大切な關係を有してをつた事を閑却してはならない。其は他でもない。此の留學が英國無雙の英傑ネルソン提督の戰術や手段を研究する好機會となつたからである。

英國ポーツマス港を訪ふた者は、誰れでも港の奥の方に、三橋高舷の舊式な一木造艦が

其の大橋上に大將旗を掲げ巍然として泛んで居るのを見るであらう。これこそは、西曆千八百五年(我が文)十月二十一日ネルソン提督が之に坐乗し、以てトラファルガル附近に最後の奮戦を試みて佛・西聯合艦隊を撃破し、佛帝ナポレオンの大野心を挫いて祖國を救ひたる、音に名高き旗艦ヴキトリイ號なのである。然して政府はウイスター號乗組の練習生が、同艦の大砲や武器を見學するのを許してゐた關係から、元帥も屢々同艦に往つて研究を重ねたのみならず、西曆千八百七十三年(我が明)トラファルガル海戦の第六十八回の記念日には、スミス大佐に伴はれて同艦に至り、橋上に懸へる所の、

『英國は各自が其の本分を盡すを期待す』

との名信號を仰ぎ、激戦の狀況を聽いて深き感動を受けたが、何ぞ知らん異國の此の一年青年が三十二年後には、史上無比の大勝を博し、ネルソンをして後に瞠若たらしむるの大英雄たらんとは、觀じ來ると天の配劑絶妙なりといふべしだ。

處で爰にトラファルガル海戦と日本海海戦とを對照すると、頗る興味ある問題が起つてくる。と云ふのは、開戦當初に於ける對敵形勢が、兩者全く相反してゐて、即ちトラファルガルに於けるネルソン提督の取つた二列縦陣は、日本海に於ける露國艦隊の倣つた所で

あるし、東郷元帥が敵の進路を遮つて砲火を敵の兩先頭艦に集中した行き方は、佛國艦隊が英國艦隊に對して取つたのと同じ關係になつてゐる。それにも拘らず前者の勝つた陣形を以て後者の敗れたのは何故であらう。其處が逸すべからざる重要點であると同時に、兵は活物であつて、柱に膠して瑟を鼓くやうなことは、共に兵を談ずるに足らないのである。これに關し鬼才を以て稱されたる畏友秋山眞之中將の名論がある。それは斯うだ。

『トラファルガル海戦圖と日本海海戦圖とを比較して見ると、大に似寄た所がある。然るに戦鬪の結果は全然反對で、トラファルガルで勝ちたる戦法は、日本海で破れて居る。

これ一は汽船兵器の進歩の然らしめたものであるが、當時の英國海軍と等しく、我が艦隊將士の意氣と砲術とが、遙に敵に優つて居つたことが、戦法の如何に拘らず勝利の大原因をなすを證明してをる。併しネルソン提督の當時の戦法と、東郷大將の我國固有の戦法とを比較するならば、余は矢張り數理上より推して、東郷大將の戦法を適良と認めざるを得ない。其の證據が明瞭に戦果に表れてゐて、當時の英國艦隊の損害は中々多大であつて、主將たるネルソン迄も戦死を遂ぐるに至つて居る。然るに日本海海戦では、我が艦隊の損害は眞に僅少であつた。これ戦法の適否に原因すること多からうと思はれ

る。殊に東郷大將の取られたる、功を一時に收めずして數段の大計畫により漸次に戦勝を制せられたる大略と、ネルソンの一氣呵成に敵を撃滅せんとする如きことを比較すると、古今東西兩名將の價値を定むるに、大に興味あること、思ふ。」

余は更に此の評論に一步を進め、東郷元帥の緩急宜しきを得たる妙術と、ネルソンの無二無三の驀進一點張りの戦法とは、主將たるの品位に於て到底同日の談にあらずと言ひたいのである。故に曰く、

『ネルソンは兵に將たるの名將にして、東郷元帥は將に將たるの聖將なり。』
讀者以て如何となす!?

明治五年以來三年間、ウイスター一號にありて海軍智識を習得した東郷元帥は、同八年二十九歳の時更に帆前船のハンブシヤア號(排水量一噸、速力二四)に移乗し、實地練習のため二月の初旬テムス河口を出て、濠洲メルボルンを経て世界を一周し、航程實に三萬哩を算して同年九月無事テムス河口に歸著した。我が海軍將校にして全然帆船に依り世界を一周したる者は、まさに東郷元帥を以て嚆矢となすやうである。

尋て翌九年に至り、元帥は當時我が政府より新に英國に製造を依頼したる三艦(扶桑、金剛、比叡)中の最大艦扶桑(排水量三七一噸、速力二三)の建造監視を命ぜられたが、明治十一年の二月頃三艦何れもも相前後して竣工を告げたので、同僚二名と共に比叡(排水量二四八噸、速力二三餘)に乗じて三月英國を出艦し、同五月二十二日八年振にて芽出度故國の土を踏み、後幾もなくして夫人を迎へ家庭を形づくるに至つた。元帥時に年齢三十二歳、夫人鐵子(海江田信義子長女)は十七歳であつた。

○活躍

英國海軍の新智識を齎して歸朝した元帥は、時節柄とは云ひながら、其の出世は目醒しいものであつた。即ち歸朝した明治十一年の七月には中尉に、同十二月には大尉に、翌十二年の十二月には少佐に、十八年六月には中佐に任ぜられたが、更に翌十九年には武官官等の改正により、中佐たる元帥は奏任二等の大佐となつた。

此の間に於て、尉官時代は扶桑・比叡の乗組に、少佐時代は迅鯨(排水量一四五噸)天城(排水量九速力一)の副長より第二丁卯(排水量二噸)天城の艦長に、中佐時代は大和(排水量一四七六噸、速力一三)淺間(排水量一

(四二) の艦長に補せられた。然して其の中に就いて活躍の最も目醒ましかつた第一は、明治十五年朝鮮京城の變後仁川に赴いた際であつた。當時元帥は少佐で天城副長の職に居り金剛・清輝・日進・比叡・孟春・盤城の諸艦と共に海軍少將仁禮景範の指揮の下に、公使花房義質の乗船明治丸を護衛して仁川に入港したが、天城は命を受けて南洋灣内を視察するやら、大同江を三十餘里も溯り、更に汽艇に移りて復又三十里を溯行し、平壤附近まで達して地勢を視たり、水深を測量したりしたのみならず、ある日支那方の大立者たる袁世凱を訪問した。すると彼は小僧推參なれ、いで煙に巻いて驚かして呉れやうと、得意の快辯を縦横に振ひだし、東洋の大勢より日支親善の必要を論じ、教ふる如く諭すが如く説き去り説き來つて、口角泡を飛ばすこと時餘に及んだが、其の間靜に相手の面上を凝視て黙黙としてゐた東郷少佐は、通譯の了るを待ちて、「俺には解らん」と大喝一聲し、其の後は一切相手の談論に耳を貸さず、兩頬を膨ましてプーと息を吐く許りであつたので、有繋の怪傑も施すに術なく、手持無沙汰に論鋒を收めたといふ。

第二の活動は同十七年、天城艦長として清佛戰爭を視察に赴いた時で、此の序を以てまづ楊子江を溯り、鎮江・南京・蕪湖等を過ぎて終に上海を距つる六百餘哩なる漢口に達し、

具に地勢を察して四通八達の要地なるを察し、將來必ず重要地點たるべきを報告して居る。蓋し皇國軍艦が其處まで溯行したのは之が最初なのである。然うして此の前後に於て、軍艦全般が乗組兵員の食費を、金錢で支給して居る現制を弊害ありと考へて之を物品に改めるを是なりとし、獨斷で自艦に之を實行して見たところ、頗る好結果を得たので終に其の始末を司令官に報告し、漸次他艦も之に倣つて今日のやうな制度になつたと傳聞する。

同年八月二十三日清・佛兩國艦隊は、福州馬尾に於て遂に砲火を交ふるに至つた。是に於て天城は同方面に急航したが、佛國艦隊司令官クルベール中將は、馬尾の一戦に清國艦隊を粉砕した後艦隊を二分し、司令官レスピー少將をして其の一隊三艦を率ゐて臺灣淡水港を攻撃せしめ、親ら七艦より成る他の一隊を指揮して鷄籠港を陥れ、尋で二千名の陸兵を揚げて一戦に港兵を破り、僅に一日で砲壘・兵營等を略取して了つた。

天城艦長東郷少佐は、此の以前より根氣強く佛艦隊に尾航して其の動靜を視察するので、クルベール提督は煩くて堪らず、何とかしてまいてやらうと種々工作して見たが、天城は牛蝨のやうにへばり付いていつかな離れないので、有繋の名提督も呆れかへつて到頭我を折り、尾航隨意を默許するに至つたから、得たりと許り天城艦長はいよく銳利の觀察を擅

にした。

『彼様場合には押強くグンと行るに限る』

これは後年此の際の顛末を余に語られた元帥の言葉で、もつて當時に於ける其の根氣の程も推されるては無いか。

されば佛艦隊が鷄籠港を陥れると間もなく、東郷艦長は旗艦ヂュケー・トルアンにクルベール提督を訪問し、占領砲臺の内部を見たき旨を直談判に及んだ。すると例の執拗さに辟易してゐることゝて直ぐに快諾を與へたので、艦長は翌朝早速上陸し、一分隊の兵を率ゐて出迎へた一工兵大尉に案内せられて、思ふ存分に砲臺等の内部を視察研究することを得た。然うして此の案内者たりし工兵大尉こそは三十餘年後の世界大戦に當り、勇猛無雙の獨逸軍を見事に撃退して、祖國を累卵の危に救つたジョツフル將軍で、戦後我が邦に來り圖らずも東郷元帥と佛國大使館に劇的面會を遂げたと云ふ奇談の所有主であつた。

○識見

布哇の土民語の中にトイゴ一といふ言葉があつて、『人間以上』とか『偉大』とかいふ意に使用されてゐるさうな。これは明治二十六年に勃發した同國政變の際、浪速(排水量三七〇八)艦長として在留邦人の保護の爲め同國ホノル、港に廻航した東郷大佐が、萬丈の氣を吐いて日本魂の何たるかを示し、以て歐・米人を驚かした英雄的態度を瞻仰した土人の感激の迸りであつて、日本人中にも未だ元帥の偉人たることを知つてゐた者が殆ど無かつた時代に、絶海群島の土民中に夙にかゝる言葉が使はれてゐたとは、不思議な因縁とでもいふのであらう。

『一同に一言する。本艦がこのホノル、に碇泊するのは、皇國領土の一部が此處へ延長したと同様の意義を有するものとなる。この意味に於て我々の責任は一層重大となるのであるから、今後變亂等の有無に拘らず、我々の一舉一動は、直に皇國の品位にまで影響を及ぼすものであることを記憶し、輕舉妄動を慎むと同時に、いよく決行する場合に些も躊躇することなく、斷乎として進むべきに進み、以て皇國武人の覺悟を遺憾なく發揮するやう切望する。』

ホノルル著港と同時に、三百五十餘人の乗員を集めて此の訓令を下した東郷艦長は、爾

後爛々たる眼光に群島の天地を睥睨し、事あらば目にも見せんと待構へてゐた。

すると間もなく禮砲問題といふものが起つた。それはカメハメハ王以來八十餘年間連綿たりし王室も、第八世り、オカラニ女王の代となりし今、從來布かれたる憲法に大改正を加へやうとしたのが動機となり、歐・米の移住者より猛烈な反抗を受けた結果、米國軍艦ボストン號より上陸した陸戦隊に威壓せられ、王政爰に終結を告げ、米國の力に依れる假政府といふものが出現したので、ドールといふ一市民が選ばれて假政府の大統領となつた。之に對し同政府より禮砲を放つて呉れと浪速に交渉して來たのが問題となつたのである。東郷艦長は交渉員に向ひ、

『東郷は布哇國王に禮砲を放つ事なら承知し居るも、假政府とかいふ得體の判らぬものに放つなどは以ての外だ。お斷り申す。』

と、魚膠もなく刎ねつけ、布哇國旗を飜したる汽艇に打乗り、意氣揚々と浪速の附近を通りて米艦に赴くドール大統領を、艦上より冷然と見下したる浪速艦長は、エヘンと一つ咳嗽をやつたのみだ。

丁度其頃であつた。ある朝今田與作といへる我が一青年の囚人、獄を脱して浪速に遁げ

込んで來た。布哇政府の警官數名之を追跡して同艦に至り、引渡を請求したが、東郷艦長は斷乎として之を謝絶した。仍で更に上役が來た。警視總監が來た。警保局長が來た。然うして手を替へ品を替へて嚴談に及んだが、東郷艦長は頑として之に應じないので、彼等は痛く業を煮やし、終に米國艦隊の力を借りて囚人を取戻すとの風説を流布せしめた。浪速の艦長室にあつて此の新聞記事を読んだ東郷艦長は、珍くも面上に會心の笑を漂はせてゐた。併し後に至り、さしも頑強の艦長も、本國の海軍大臣よりの命により、囚人を引渡さざるを得ざるに至つたので、我が領事館員を呼つけ容を正し、

『彼れ犯人もわれ／＼と同じく日本臣民の一人ではないか、それがみす／＼外人の手に依りて斷罪せらるゝのを見てゐるのは東郷の忍びぬ所ぢや。されば得體の知れぬ假政府に引渡しは出來ぬ。貴下方にお渡しするから、東郷の眼の届かぬ場所如何様とも取計らひなさい。又假政府の公文書に對する返答は、日本文で認めて置いた。總領事は英文で認めて呉れと言はれたが、東郷は御免蒙る。』

斯様にして紛糾を極めた事件も辛うじて落著し、總領事等は始めて安堵の胸を撫下したといふ。

○沈 勇

『英船高陞號擊沈!』

此の一語は霹靂の如く我が朝野を震撼せしめた。それも其の筈。今や(明治二十七年七月二十五日)遂に清國と砲火相見ゆるに至つた我が兵力は、彼一國に對してさへ果して勝利を得るや否や、まだ未知數の状態たる時機ではあつたし、縦へ清兵を搭載して居たからとは言へ、國もあらうに、世界の海上王とまで自他共に許してゐる英國の汽船を擊沈したといふのであるから、如何様震撼するのも道理である。然うして夫れが浪速艦長東郷平八郎といふ一大佐の獨斷に出たのであると判つた時、國民の憤懣と恨惑とは艦長の一身に集り、特に閣員達は憂色に包まれ總理大臣伊藤博文侯の如きは、激怒の餘り軍務局長山本權兵衛大佐を呼付け、『こんな大事を仕でかし、海軍は責任を何うするのだ。』

と叱咤し、拳を以てドシンと机を打叩いたので、机上のウキスキー壘とコップが空に躍つて床上に落碎けるやうな活劇さへ演ずるに至つた。併しこれを傳聞した東郷艦長は平然

として、

『東郷の仕方に手落は御座らぬ。』

と言ひ放つて居たが、果せるかな一時沸き立つた英國の輿論も、公法學の泰斗たるホルランド博士やウエストレーキ博士等の公平なる意見に依り、幾もなくして沈靜に歸し、寧ろ東郷艦長の勇斷を賞讃するの聲と變つたのである。

申すも畏けれど、明治天皇が東郷平八郎といふ姓名を確と御記憶にならせられたのは、此の高陞號擊沈の一事からであると言はれる。開は前述の如く、伊藤首相の激怒すら買つた程であるから、恐れながら大元帥陛下に於かせられても、如何に宸襟を惱ませられしかは拜察し奉るに餘りある。然るに事件は嘗に無事落著したのみならず、反つて皇國の武威を耀かす結果となつたので、東郷艦長に對する御感斜ならず、

『善く致した』

との御詫さへあつたと仄に拜承する。

抑も東郷元帥が一介の武人にして、布哇の活躍と云ひ、高陞號の擊沈と云ひ、重大な國際事件に處して其の措置を誤らなかつたのは、決して海軍の智識のみにて爲し得べきもの

では無い。蓋し元帥は浪速艦長に補せられる以前に於て毎々病に罹り、二年間に九回の引入りを爲してゐるが、其の間に外交に關する智識の涵養に努め、

『艦長たる職務は屢々外交上自分一個の意思に依り決せねばならぬ場合に出會ふもので、従つて平素より之に關する智識を養つて置かぬと、事に臨んで思ひも寄らぬ手違を生じ、累を國家にまで及ぼす事があるものだ。されば戦術や艦の操縦等に次いで必要なるは外交上の智識で、外交といふものは往々にして、微細の裏に重大な關係が藏されて居るところあるを忘れず、之を看破して判断を誤らぬやうにせねばならぬ。』

と青年將校等にも諭して居つた程であるから、措置宜しきを得たのも當然であらう。這は實に大切な事柄で、客氣に驅られる壯年將校中には、動もすると非合理の脱線をなし、遣り損は割腹して申譯する許りさ。などと豪語する者なきにしもあらずだが、开は甚しい心得違ひで、自分一個が生命を捨て、濟む程なら兎も角、事と品によりては、國家に對して取返しのかかぬやうな重大な關係を仕でかさぬとも限らない。元帥が厚くこれを諭されたのも、後輩の人々が徒らに元帥の取つた事跡の輪廓のみに倣はうとして、其の用意を忘るゝを恐れたからであらう。何にしても高陞號撃沈は、元帥の經歷中特筆すべき事件の

一たるを失はない。

尋で同年九月十七日黄海に於て起つた日清兩國の海軍主力の決戦は、元帥が大佐時代に於ける最も花やかな場面であつた。當時猶ほ浪速艦長たりし東郷大佐は、先鋒たる第一游击隊の殿艦として、僚艦吉野(坪井司令)高千穂・秋津洲と共に高速力を利用して、縦横に敵を驅け惱ましてゐたが、圖らずも御誅に宣せられたる沈勇の本領を發揮する場合に遭遇した。それは戦闘酣なる頃、敵彈の爲め舵機を損じて操縦不如意になつた假裝巡洋艦西京丸(樺山軍令)が、浪速の前路を横切らうとしたのに基いて起つた事なのである。

抑も激戦の際には速力を緩めるさへ頗る不利なので、況して航進を停止する如きは、孤立に陥るのみか、敵彈の好標的となつて危険此の上もないのである。併し西京丸の窮狀を察したる東郷浪速艦長は、直に速力を停めて西京丸の通過を待つた。それが爲め西京丸は無事なるを得たるも、浪速は果して前續艦と離れ孤立の狀態となつた。それと見た敵艦定遠・鎮遠・致遠の三艦は、好き餌物御參なれと許り、雁行し來つて我に迫り、連放つ巨彈は怒り飛んで浪速の四面水柱に圍まれたが、艦長自若として將兵を勵まし、丁汝昌・林泰曹・劉步蟾の三名將を向ふに廻し、惡戦苦闘の上見事に重圍を衝いて遂に前續艦に追及す

るを得、敵將等をして其の沈勇剛毅に舌を巻かした。然して東郷大佐も亦丁汝昌等の存外勇烈なるを知り、後威海衛の陥落に際し、汝昌が衣服を改め香を焼いて北京の方を拜しつゝ自殺したるを聞くや、友人への書信中に記して曰く、

『丁汝昌は感心に死申候』

○信念

明治三十七八年戦役に、聯合艦隊司令長官の重任を拜命したる東郷大將（開戦の當初は）は金剛不壞の大信念と純忠至誠の大精神とを眞向に振翳して、徹頭徹尾攻勢を取り、以て敵をして出づる所を知らざらしめたのである。

『天佑を確信して聯合艦隊の大成功を遂げよ。』

これぞ征途第一の命令末文であつて、其の信仰は巍々として輝き、『天佑』の二字無限の權威を示して全軍の兵氣いやが上にも振ひ起つたのである。かくて明治三十七年二月八日の夜より九日に亘りて第一次の攻撃を旅順の露國艦隊に加へてより、五月二十六日遼東半

島南部の直接封鎖の宣言を爲すに至るまで、前後八回の攻撃と三回の港口閉塞を執行し、以て敵艦隊を旅順港内に壓抑して陸兵の遼東半島上陸を安全ならしめ、續いて海陸両面より旅順を包圍し、或は陸戦重砲隊を擧げて陸軍を援助したり、或は小艦を海岸近くに進めて陸軍に應援したり、或は大擧出動の敵艦隊を黄海に撃破し、それをして再び起つ能はざるに至らしめたり、東郷司令長官の大戦略は著々圖に中り、絶大の功を奏したのである。されば大元帥陛下の叡感斜ならず、僅に十ヶ月の間に勅語を賜つたこと九回に及んでゐるのは、皇國古來の武將中恐らく東郷元帥一人であらう。併しそれ丈に又苦心の程も察しやらるゝので、名將マカロフを斃したり、ウキトゲフトを屠つたりした痛快事の半面には、悲惨の數々が存在して居るのを閑却してはならない。就中五月十二日より十七日に至る僅々六日間に八隻の艦・艇を亡失し、其の中には六隻より外に無い戦艦中の初瀬・八島も加はつて居るので、

『本職は之を報告するに臨み只遺憾と云ふの外なし。』

と痛恨骨に徹する報告を大本營に致した當時の長官の胸中は什麼であつたらう。併し大磐石の如き決心を有する長官は、泰然として微塵も憂色を表さなかつた。又其の凶報に接

三〇
した國民も意外に沈靜で、日頃最も敬愛し信賴してをる東郷長官に對し、同情の涙をこそ
濺げ、一人として非難するやうな者はなく、我々をして全國民の同長官に對する信望の厚
きに驚歎せしめたのである。

陸に乃木あり海に東郷あり。兩將が至誠の精神は膠漆よりも密に、相依り相助けてさし
も雄威を誇つた敵艦隊を殲滅するに至つたので、東郷長官は親しく上陸して十二月二十日
乃木第三軍司令官を其の司令部に訪問し、熱誠籠つた握手を交した。

思へば彼も我も半歳の久しきに互り、強敵と戦ひ。寒暑と戦ひ。風雪と戦ひ。此れは艦
艇十餘隻の亡失と、許多の將兵が忠死とを偲びて鬚鬢遽に霜を増せば、彼れは二愛子を君
國に捧げ、肉弾的惡戰に幾萬の勇士が健氣の戦歿を憶ふて頬肉一入寒い。斯かる境遇にあ
つた兩將が、今や辛うじて其の忠志を達し、此處に相見ゆるを得たその感懷や果して如何。
あまりに壯にして烈なる光景に打たれ、場にありし者一人として頭を低れぬは無かつたと
云ふ。

斯くて其の翌々日東郷司令長官は大本營に左の報告を發した。其の中には長官の他を推
賞する美德が躍動してゐる。

『勇武絶倫なる攻圍軍の猛烈不撓の攻撃に依り旅順口の死命を制すべき二〇三高地が我軍
の有に歸せしより港内敵艦隊に對し攻城重砲の擲射益々其の威力を逞うし「ポルタワ」
「レトウキザン」は忽ち沈没し「ポベータ」「ペレスウエイト」「パルラーダ」「バヤーン」
も相踵て撃沈せられ獨り「セワストーポリ」のみ去る九日朝背面よりの砲火を逃れて港
外城頭山下に逸し碇泊せしも是亦我が水雷艇の連續果敢なる襲撃に傷つき今や殆ど全く
戦闘航海力を失ふに至れり旅順敵艦隊の主力は事實上茲に全く滅亡に歸し唯殘存せるも
の無勢力なる砲艦「オツワージヌイ」及び驅逐艦數隻に過ぎず是に於て聯合艦隊は去る
五月一日以來強行したる封鎖配備中不必要なる一部を撤すると同時に益々旅順口及び港
外よりの破封鎖船舶の監視を密にし且殘存の敵艦艇に對する警戒を嚴にせんとす
此の長日月の封鎖戰中敵の敷設及び浮流水雷の危害風濤濃霧の險難等常に絶えず前に宮
古・吉野・初瀬・八島・大島・曉・海門の災厄あり後に速鳥・平遠・愛宕・濟遠・高砂
の遭難起り忠死の將卒も亦少きにあらざると雖も幸にして終始封鎖を維持することを得
得時に敵の脱出する事ありしも毎々其の企圖を破り終に攻圍軍の至大なる協力に依り茲
に殆ど當方面敵艦隊全滅の成果を見るに及び又浦鹽方面の敵艦隊も曩に我が第二艦隊の

爲めに大打撃を受けて爾後再び出動するの氣勢なきに至り唯益々大元帥陛下御威徳の及ぶ所の洪大なるに感ずるの外なきなり而して此の間又麾下各部隊が各々其の能力に應じて終始能く其の任務を遂行し得たるのみならず死を決して敵港を閉塞したる閉塞船隊・連続撓まずして敵前に機械水雷を沈置したる艦艇・危険を冒して敵海の掃除に従事したる特別掃海隊並に敵弾に暴露して敵艦を監視したる前進望樓員等の特別勤務が當方面の封鎖戦に至大の効力ありしことを附報するは本職の上下に對する職責と信ずる所なり』
 斯様にしてさしも頑強なりし露國艦隊も、翌三十八年一月一日に至り、旅順の開城と共に全滅に歸し、爾後長い間其の殘骸を旅順港内の波間に留めて、漫に末路の英雄を想はしめてゐた。

○偉功

『新來の敵に對しては誓つて之を撃滅し、宸襟を安じ奉ります。』

これは露の本國を出發して東航の途中にある露國新艦隊を邀撃すべく、明治三十八年二

月初旬帝都を辭するの砌、御下問に對する東郷聯合艦隊司令長官の奉答であつて、上は御稜威を戴き奉り、下は部下將兵の忠烈と伎倆とを確認した大信念の流露で、正に史上に特筆して萬世に傳ふべきものであらう。惟ふに敵艦隊殲滅の事態こそ日本海に於て實現したれ、我が全勝の氣勢は、既に此の奉答中に表發し、神機もまた脈々と躍動してゐたのである。

やがて吳軍港に於て再度旗艦三笠(排水量一五一四〇噸、速力一八浬)に座乗した大將は、二月下旬韓國南岸鎮海灣に移り、艦隊の總勢力を此處に集めて之を統督し、將兵をして猛訓練を爲さしむると同時に、參謀長加藤友三郎少將以下の幕僚と會し、想を練り意を凝して一大戰策を定めた。これぞ大將が多年の研鑽に加ふるに旅順口に於ける實驗を參酌し、更に本邦中古水軍の精神並に孫子以下の兵法七書等をも咀嚼したもので、その獨得の『丁字』『乙字』の戰法一段の洗練を示し、一正一奇の妙、端倪すべきやうもなかつた。然して一面では麾下一般に對し、戰鬪實施の覺悟を次のやうに懇諭してゐる。

一、作戰の萬事警戒を最要とす。大敵を怖れず小敵を侮らず。常に敵の來らざるを恃まず。我常に待つ處あれば、決して不覺を執るべきものにあらず。古來往々實戰の後に

悔事を残すは、敵に乗ぜらるべき我の虚ありしを以てなり。油断は大敵なり。寸時細事にも警戒を怠るべからず。

一、戦闘における士氣の消長は戦果に關係すること頗る大なり。戦場の經歷少きものは大抵敵を強く見我を弱く感ずるを常とす。これ敵艦内の惨害等は、我これを見る能はざるも、我の被害は常に心目に觸るゝを以てなり。血路を開きて逃走せんとする敵艦を見て、我に迫撃し來るものと誤り、あるひは敵が困憊の極唯砲彈を亂射するを見て、我を猛射するものと認むる等の實例なきにあらず。特に戦酣にして勝敗方に決せんとする際には、實際勝戦なるに自ら苦戦と感ずること多し。故に我苦戦するときは、敵はその數倍も苦めるものと觀念するを可とす。古の兵家これを七分三分の叶合と戒む。即ち敵七分我三分と思ふ時が、實際五分五分なりとの謂なり。

一、己に合戦するに當りてはまた防禦をいふの要なし。積極の攻撃は最良の防禦なり。假令非装甲艦と雖も、我が猛火を以て敵の砲火を撃壓すれば、これ取りも直さず最良の装甲を有するに等し。我が砲數少き場合に於ても、その照準發射迅速確實なるときは、恰も我が砲數を倍加せるが如し。黄海海戦に見るに、我の三發する間に彼一發す

るの比例なりし故に、我が一門は能く彼の三門と對抗するを得べし。況んや我が射撃の練度は、遙に敵に優るあるに於てをや。

一、戦術實施の要訣は、己の欲せざる處を敵に施すと同時に、敵より施されざるにあり。故に斯くされては苦むと思考することを、我より先づ施すこと肝要にして、常に機先を制せざるべからず。(以下略す)

日本海海戦を此處に詳記することは、紙數の許さざる所であるし、既に世間に知られても居るゆゑ之を省いて、唯其中より重要な事項二三を摘録することにしやう。

先づ第一は有名なる信號掲揚竝に敵前回頭の光景である。時は明治三十八年五月二十七日午後一時五十五分。旗艦三笠の橋上には四色の彩旗翻りて千載不朽の名句鮮に讀まれた。曰く。

『皇國の興廢此の一戦に在り各員一層奮勵努力せよ』

信號旗閃く下、前部の最上艦橋には、御國の運命を雙肩に荷ふた東郷大將が、一文字吉房の名刀を帶して悠然と立つた。大將時に年齢五十九。天賦の偉器は多年の修養に玉成せられて神彩さながら天將の如く、靜に震天動地の鏖戦を待つ有様は、正にこれ朝日に匂ふ

櫻花の、咲きも残さず散りも初めぬ風情である。

全艦隊幾萬の將兵遙に此の信號を望むや、無限の感懐に打たれて一語なく、一念唯忠誠に燃えて必ず敵を撃滅せんことを期し、同時に慈父とも慕ふ大將の胸中を推量りて涙を落した者さへあつた。想へ！御前での奉答を實現して宸襟を安んじ奉るは誰が任であらう。國民が十年臥薪嘗膽の甲斐あらしめるは誰が任であらう。皇國海軍の眞價を發揮せしめるは誰が任であらう。此の數々の重大事が悉く我東郷の責任であると觀じ來るとき、其處に東郷も無く、肉體も無く、小我も無く、妄念も無く、唯人格化せられた皇國の臣道があるのみだから、水火も避け巨弾も逸れやう。

幾もなくして三十九隻より成る敵の大艦隊は濛氣を破つて現れた。然も我が單縱陣に對し彼は二列縱陣をもつて次第に相近づき、もしそのままにして直進するならば、互に敵を左舷に見る反航戦となり、利害共に相均い形勢を以て通過するに至るのだ。併し敵を全滅することを誓つてゐる東郷大將は、その如き平凡な戦に満足すべき筈がない。果せるかな『敵の先頭艦八千』の報告を聴くや、それまで幕僚等の論争を餘所に、敵を望見してゐた大將の眼はキラリと光つた。同時に其の右手はサツと舉つて左舷の方へ振下された。言ふ

までも無く取舵の命令なので、三笠は忽ち艦首を左方に振向け南西微南より東北東に變針し、敵に對して笠を被せた如く行手を遮つたから、爰に大將得意の『丁字戦法』は見事に形造られた。嗚呼この一斷！これ實に敵を撃滅して全勝を得るの基礎となり、延いては強敵をして和を乞ふに至らしめ、併せて世界に於ける皇國の地位を躍進せしめたものである。

次に傳ふべきは東郷大將の武運強かりしことである。

日本海戦に従事したる第一・第二・第三・第四・第五・第六戦隊。第一・第二・第三・第四・第五驅逐隊。第一・第十・第十五・第十七・第十八艇隊等は、孰れも奮闘したのであるが、特に東郷大將の旗艦三笠は、最も敵の狙ふ所となつたので、右舷側に四十箇。左舷側に八箇の弾痕を留め、死傷合して百十三名の多きに達し、十八門(前後の砲塔四門、六吋砲十四門)の備砲中、完全なりしは僅に六吋砲五門に過ぎなかつた程の激戦を演じた其の中でも、午後二時二十分(開戦後十分)に飛來した第十六回目の命中弾は、右舷の鐵板を貫き内壁に中つて爆裂し、無數の破片四方に迸つて前艦橋にも霰の如くに注ぎ、其處に居合せた將兵十五名を傷つけたのみ

か、司令塔内にあつた將兵四名も同じ運命に陥つた。此の時東郷大將は原基羅針儀の側に立ち、雙眼鏡にて戰勢に見入つてゐた其の所へ、拳大の一弾片下より斜に艦橋を貫き、大將の胸を望んで飛來つた。ヤッ！ 思はず一齊に叫をあげた幕僚等は、色を失つてキツと見ると、大將は依然として雙眼鏡を眼に當てたまゝ、敵を眺めて小揺もしない其の脚下には、七分まで弾片に貫かれた釣床一箇横たはつて居るではないか。

『天祐！』

熱血多感の伊地知艦長は、かう獨語と共に感極まつて泣出し、それに連れて冷靜な加藤參謀長も眼をしばたゝいて息を呑んだ。

風は怒り波は逆巻き、艦上血の飛沫を散らす中に、自若として立てる大將の雄姿は、威風四邊を拂つて神々しい許りであつたので、幕僚等嘆じて曰く、

『東郷大將の身體には神経系が存在しない！』

最後に語るべきは、敵艦降服の際に於ける大將の態度である。

戰艦八隻・巡洋艦九隻・海防艦三隻・驅逐艦九隻・假裝巡洋艦一隻・特務船六隻・病院船二隻

合計三十八隻・總排水量二十一萬千二百二十噸(特務船一隻不詳に付除く)より成りし露國艦隊も、我が名將勇兵の忠義の筒先支へかね、二日と一夜の激戰にて、十九隻は撃沈せられ、其の他も諸方面に遁竄の上或は自爆し或は沈没し、然らざるものも中立國政府の爲め抑留せられて武装解除の悲運に遭ひ、兎も角も無事なるを得たるは、小巡洋艦一隻・驅逐艦二隻(以上ウラジ)特務船一隻(本國に逃走)のみであつた。かゝる中に司令官ネボガトフ少將は、戰艦二隻・海防艦二隻を率ゐて二十八日の朝、辛うじて鬱陵島附近まで遁げのびたが、遂に其の處にて我が主力艦隊等に取り圍まれ、今は早如何とも仕がたき情況に陥つたので、砲撃を受けつゝ其の軍艦旗を半降し、萬國信號に依りて降服の意を表した。我が旗艦三笠の艦橋上にて逸速くも之を認めた幕僚の一人は、

『長官！ 敵は降服の旗を揚げました。發砲を御停止になつては如何です』

と東郷大將に注意した。併し大將はそれを聽かざる如く、黙々として依然砲撃を續けさせてゐた。多淚多感のその幕僚は地團太踏み、

『長官！ 發砲を止めるのが武士の情ではありませんか。』

叫びもあへずハラ／＼と落涙した。併し如何なる場合にても、情に驅られて靜觀を失ふ

やうなことなき大將は、氣負ひかゝる幕僚を徐に制し、

『まあ待て！ 降服旗は擧げたがまだ速力をかけてゐるし、砲口をも此方に向けてをる。發砲を止めるには早い。』

敢然たる理智の答へに、さしも俠骨稜々たる幕僚も、返す言葉がなかつたと云ふ。然して彼が速力を停止するや、咄嗟に發砲を止めて彼の降服を容れ、三笠に招くに當つて、帶劔を許して武士の面目を保たしめた。

〇 恪 勤

大正三年より同十年に至る七年間。東宮御學問所總裁として殿下御教育の重任を仰付かつた東郷元帥は、痛切なる覺悟の許に、身心を至誠の坩堝に投入れて御奉公しやうと決心した。それも其の筈で、成る程旅順口の攻略や日本海海戦は、聯合艦隊司令長官たりし元帥に取りて重大責任であつたことは云ふまでもない。併し慶應二年二十歳を以て薩藩の海軍に入りてより四十年間。練りに練り鍛へた海軍の智識を以て扱き得る事ではある

し、加之其の際の機運は、元帥をして必勝の自信を有せしめてゐたればこそ、誓つて敵を撃滅して宸襟を安んじ奉ります。との奉答さへしてをる程ではないか。然るにこれは夫れとは事かはり、日本一の教育家としても、容易にお受け出来ないやうな重大事を、無經驗な身を以て拜承せねばならぬやうな事情に立至つたのであるから、其の胸中は什麼であつたらう。必や一命を皇祖皇宗の神靈に捧げまつり、大任の完成を祈願し奉つたに相違ない。従つて今や元帥の一言一行は、必然的に人間の模範とならねばならぬやうな境遇に置かれたのである。元帥は酒を斷つた。煙草を斷つた。狩獵を斷つた。別荘ゆきを斷つた。私の旅行を斷つた。斯くして涙ぐましまでの自制を強調すると同時に、御用掛たる學界・教育界の權威を集めて御教育の大方針を定め、七年の長きに互つて蹇々匪躬の誠を效したが終には論語に所謂心の欲する所に從へども矩を踰すとの至徳の域に達し、英雄東郷は聖將東郷となり、一代の國士杉浦重剛翁をして、斯う感嘆せしめてをる。

『現下の日本に於て、東郷さん程東宮御學問所總裁の適任者は他にあるまい。それは英雄だとか勇將だとかいふ點からでは無い。唯その終始一貫の誠實からだ。あの毎年末と年始とに行はせられる御終業式と御始業式との際、東郷さんが御前に進んで、その學年の

御成績や將來希望し奉る點を言上する時の容子にはつくづく感心させられる。あの地位、あの功績で、加之總裁でありながら、鞠躬如たる態度ばかりか、七年の最終の時まで、何時も聲が顫へてゐた。一度あの容子を見聞したら、誰れでも其の誠意に打たれない者は無いであらう。榮達して慎み、親しみて狎れ奉らず。君子にあらざれば能はぬ所だ。』
洵に適切な言葉である。

大正十年二月十八日御學問所に於て御修了式が擧げさせらるゝや、同二十一日東郷總裁以下御學問所職員一同を、東宮御所に召させられ、表御座所に於て拜謁仰付られたる上、東郷總裁に左の令旨を賜つた。

今回御學問所ノ學業滞リ無ク終了シ誠ニ喜ブ數年間總裁以下職員一同ノ懇篤ナル勤勞ヲ深ク謝ス

東郷總裁乃ち一同を代表して令旨に奉答した。越えて三月一日に至り、東宮御學問所は御閉鎖となり、元帥には御物たる三條吉則作の名刀(御紋章散し太刀造り 長さ二尺三寸)を賜つた。

○遺訓

爲すべきを爲し盡すべきを盡し了りて八十八歳の五月三十日。即ち二十九年前の同月同日は、日本海に空前の偉功を建て、佐世保に凱旋し、惶くも大元帥陛下より、

朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌フ

との有難き勅語を賜はつた其の同日に、我々をして臨終の席に侍するの哀情を超越して神前に叩頭の思あらしめつゝ、安晏として昇天せられた東郷元帥は、御稜威の下に人種の差別徹廢を期し、それに依らねば實現すべくもない人類の、眞の幸福を大理想とせさせ給ふ皇謨をば、翼賛し奉るべく出現した人であらう。然してそれは先づ黃白兩人種の智能に區別なきことを、事實の上に證據立てたる日本海海戦より始まつてゐる。當時英國の名士ウキルソン感嘆して曰く。

『此の海戦は人類の歴史上に一新紀元を劃した。今や白人優勝の潮勢は既にその極限に達したので、恐らくは本世紀内に漸次衰退に赴くであらう。これまで歐亞の間に劃せられた隔線は最早撤去せられたのである。』

亞細亞人も至艱至難の事業に當つては、白人種に比して優劣なき事が、實に今回の戦争に徴して始めて證據立てられた。此の事實は後世に至つても變ることにはあるまい。相異りたる人種の間、に不平等の觀念を挾みたる時代は過ぎ去つた。』
一讀して痛快淋漓たるを覺える。

申すまでもなく、元帥は武人の本分を守つて一步も其の埒外に出まいとせられた。併し複雑な時代相に對して本分を誤るまいとするには、先づ如何に處するが本分に叶ふかを討究し置くの要がある。

それには政治の現状も知らざるべからず。國際關係も知らざるべからず。外交の情況も知らざるべからず。世界の大勢も知らざるべからず。もし夫等に關し無智識であつたなら、怎うして世相の變遷に應ずる本分の那邊にあるかを覺ることが出來やうぞ。

況てや皇國の將來を達觀して、永遠の大策を建てんとする柱石の臣としては、造次顛沛にも君國を念とし、以て股肱と頼まれ奉りし聖恩に答へねばなるまい。元帥は不斷に前記の諸智識を收得し之を本分化せられてゐたのである。されば、其の嚴守された本分は決して單純な思考より出てゐるのではなく、七色合して無色となる體のものであつた。従つて

皇國を中堅とする東洋の運命に關しても、將又世界の將來に就いても、識語せられた所あるが、此處に掲載することは差控へることにした。

元帥嘗て東宮御學問所總裁を拜命したる時述懐して曰く、

おろかなる心につくす誠をば

みそなはしてよ天つちの神

其の八十八年の生涯は、此の歌意を以て一貫せられてをる。さうしてこれが後進に對する遺訓でもあらう。

